

美

こ

善

西田 幾多郎

一

我々は通常知識の對象界を唯一の世界と考へ、我々は唯此世界の中に生き、此世界の中に働いて居ると考へて居る。併しかゝる立場から見れば、私の意志、私の行爲といふ如きものも、他の知識の對象と同じく、單なる知識の對象でなければならぬ。私の意志、私の行爲といふ如き意識の起つて來るすべはない。意志の意識、行爲の意識の成立するには、働きが働き自身を知ること、即ち働くといふことが知るといふことがなければならぬ。元來、我々が知るといふことも一種の意志であり、行爲である。

我々は單なる知識の對象界に生きて居るのではない、我々は常に行爲の對象界に於て生きて居るのである。美とは單なる快感ではない。若し美が單に快感であるならば、美には一般妥當性を要求することはできぬ。美とは超知識的なる深い生命の内容の表現でなければならぬ。我々に直接なる行爲の立場に於ては、すべてが人格

的生命に充ちて居る。此内容を直に表現するものが藝術家の創造作用である。藝術家の創造作用が表現運動と考へられるのも、之に由るのである。行爲の對象界に於ける生命の内容は、唯行爲によつてのみ、之を理解し、之を表現し得るのである。道徳的善といふことも單なる知識の對象界に於て説明することはできない。若し強いて之を説明しようとするれば、功利主義に陥るか然らざれば一種の幻覺と見るの外はなからう。道徳的行爲といふのも超知識的なる深い生命の要求に基いて我々の自由なる人格の世界を構成する創造作用でなければならぬ。斯くして我々の利害得失の念慮に對し、汝は斯く爲ざるべからずといふ道徳的命令の權威が立ち得るのである。善と美とは共に我々が自己の中に深く潜める超自然的なる自由我を自覺し、此立場の上に立つ時、始めて現れ來る内容であつて、同一の立場の對象界に屬すると考へることが出来る。純眞な生命の内容として善ならざる美はなく、美ならざる善はない。それでは善と美とは如何に區別せられ、如何なる關係を有するであらうか。

二

獨立にして具體的なる經驗は、すべて自覺的體系を成して居る。自覺的體系といふのは、所謂自覺に於て見る如く、知る者と知られる者とが一であつて、作用が直に作用を生み、知ることが働くことであり、働くことが知ることであると云ふことを意味するのである。視るとか、聴くとかいふことであつても、それ自身に於て獨立の具體的經驗としては、皆此の如き自覺的體系の相を具して居ると思ふ。無論かゝる知覺的經驗を、自覺的と考へるは異論のあることであらう。併し我々は自覺といふ場合に於て、その反省の方面をのみ考へて、創造の方面を忘れて居る。單に反省の對象となる靜的統一たる自己は物と同一である、眞の自己は創造作用でなければならぬ。藝術家の創造作用に於ては、理念が創造的であるのである。繪畫に於ては色や形の理念が創造的であり、音樂に於ては音の理念が創造的である。我々の視覺作用とか聽覺作用といふのは、此の如き理念の發展の過程に過ぎない。フイードレルの如く畫家の創造作用は純粹視覺の發展と考へることができるのである。私は藝術家の創造作用が色や形や音の理念の內面的發展の過程として此等の理想の自覺と云ひ得ると思ふ。自覺と云へば、我々は我々の自己が判斷の對象として意識し得るかの様に思ふかも知らぬが、我々の能働的自己が判斷の對象となることのできないのは

云ふまでもない。思惟の作用は自己發展の過程に過ぎない。所謂感覺的內容の世界に於ける理念の自覺が藝術的創造作用であり、思惟內容の世界に於ける理念の自覺が道徳的行爲である。唯我々の思惟といふのは作用の作用たる意志の反省的方面として、すべての作用の統一の立場なるが故に、此立場に於ける自覺は自覺の自覺として、すべての自覺の根源となり、すべての自覺は此立場に於て成立つと考へられるのである。

我々は通常、自己が自己を省みる省みる、自己と省られる自己と一つであるといふことを、自覺と考へられて居るが、我々の自己は單にかゝる知的統一ではなくして、自己が自己を省みると云ふのは、自己が自己の中に於ての働くことであり、自己が一步進むことであり、その事自身が消すことのできない自己の歴史を構成することである、即ち客觀的事實となるのである。此意味に於て自己は作用が直に作用を生む動的統一であり、創造的作用であると云ふことができる。私が自己の本質を意志と云ひ、行爲と考へるのは、之に由るのである。我々が物を知るといふ場合には、物があつて我が之を知るといふことができる。併し我が我を知る時、知らざる我があるといふことはできぬ、知らざるものは我ではない。それでは知つた時、はじめて我がある

と考ふべきであるか。併し我を知るものは我でなければならぬ。我なくして我を知るといふことはできぬ。我々は我々の自覺に於て明に判断以前の知識といふものを認めざるを得ない。自覺に於ては働くといふことが知るといふことである。所謂經驗界に於ては、働く者そのものを知ることができぬと考へねばならぬが、自覺に於ては我々は働く者そのものを知るのである、方それ自身が知るのである。我々は物の原因と同一の意味に於て、經驗の背後に不可知的自己を考へる時、それは考へられたる物と同列的なる自己であつて、眞の自己ではない。此の如き自己よりして自覺の意識は起り様はない。

我々の自己はその創造的方面に於て、知即行、行即知である。藝術家の創造作用はそれが行であると共に知である。筆の先鑿の先に眼があると云ふべきであらう。我々は此立場に於て知識によつて達することのできない世界を歩みつゝあるのである。過去の過去から未來の未來に互る世界歴史と考へられるものも、超個人的自己の創造的方面を表はすものである、超越的意志の創造作用に過ぎない。私が眠りつゝあつた中にも、此机上の時計は時を刻みつゝあつた、此机は昨日の机と同一の机であるが、時間上に一日だけの變化を受たと云ひ得るのは、唯超越的意志の立場に於

て云ひ得るのである。所謂客觀的世界は思惟によつて知り盡すことのできない無限なる實在であると共に、思惟によつて構成せられたものである。思惟の構成的方面と考へられるものは超越的意志であつて、所謂思惟とはその反省的方面に過ぎない、意志と思惟とは一つの作用の兩面である。藝術家が昨日の作品を取つて、再び之れを續ける時、時を超越する藝術的理念が働いて來るのである。其間の時間は全く失はれなければならぬ。我々が昨日の生活を今日も續ける時、昨日の我は直に今日の我につゞき、昨日の世界は直に今日の世界につゞく、この我は昨日の我であり、此室は昨日の室である。我々は之を證明する何物をも有たない、我々の知識は此ポスチュレートより始まるのである。昨日の經驗とか今日の經驗とかいふものが意識の表面に於ける夢幻的な現象ではなくして、我々ど此等と相働く實在であるといふのは、我々が行爲的主觀の立場に於て、始めて爾云ひ得るのである。此立場より見て實在は我々の意識を超越して存在し、昨日の我は今日の我であり、昨日の室は今日の室である。我々が此世界を無始より無終に互りて進展己むなきものと考へるは、超越的意志の世界として、作用が作用を生むといふことを意味するのである。我々の所謂實在の奥底に人格的内容の世界がある。生物學的認識、歴史的認識は之によつて成

立するのである。所謂時間空間とは超越的意志の否定的方面の範疇に過ぎない。超越的意志の積極的方面たる文化的發展の立場に於ては、恰も藝術家がその理念の立場に於て時間空間を超越するが如く、時間空間を超越して居る。現實を行爲の對象として見る時、我々は之を動かし得るといふことができるのである、現實の根柢に超越的意志の内容が働いて居る。唯作用が作用を生む超越的意志の内容として現實は何時でも不完全たるを免れない。

三

藝術的主觀と云へば、通常、主觀と客觀との合一と考へられ、美とは理想と現實との一致と考へられるのであるが、斯く云ふ場合に於ける主觀と客觀とは、知的主觀と之に對立する客觀とを意味するに過ぎない、その理想といふのも考へられた理想に過ぎない。若し斯く考へるならば、藝術的直觀とは靜的統一とも考へられ、又美とは欲望の満足の一種とも考へるの外はない。併し私は藝術的内容といふのは、我々が純粹に行爲的主觀の立場の上に立つことによつて現れ來る客觀的内容であると考へる、作用の作用たる純粹意志の經驗内容と考へるのである。與へられたものは求め

られたものであり、知覺の豫料の原理によつて、感覺が經驗内容となると云はれる如く、純なる意志の立場に對して與へられるものは「意志の豫料」の原理とも云ふべきものによつて、構成せられたものとして、一々が意志の表現でなければならぬ、知的立場を超越せる純なる意志の對象、行爲の對象として、一々が純なる活動でなければならぬ。藝術家の直觀といふのは、此る立場から物を見るのである、眼のみを以て物を見るのではない、手を加へた眼を以て物を見るのである。造形美術の創造作用を純粹視覺の發展に伴ふ表現運動と見るのも、斯く解すべきであらう。主觀と客觀の對立と合一とに就いても、種々の意義と次位とを考へることが出来る。すべて主觀と客觀との對立といふのは、作用と對象との不合一の場合に現はれるのであつて、主客合一とは對象即作用作用即對象として一つの純なる作用となることである。而して斯く純なる一つの作用となること云ふことは具體的根元に還ることである。一層高次の立場の上に立つことである。

我々が普通に創造作用といふ場合、創造する作用と創造せられる物とは別物である。併し眞の創造作用は自己の中から自己の内容を創造するものでなければならぬ。私は此の如き創造作用の真相を明にし得るものは我々の自覺であると思ふ。

省みられた我と省みる我との間に於て、創造せられたものと創造するものとの眞の關係を明にし得ると思ふ。純粹思惟がその内容を生産するといふのも、右の如き關係に於てでなければならぬ。感覺が「知覺の豫料」の原理に當倣つて經驗内容となると云ふが、與へられたものは求められたものでなければならず、眞に求められたものは作られたものでなければならぬ。我は物に於て、我自身を顔を見るのである。單なる思惟に對して經驗内容の與へられ様はない、又之によつて求められ様もない。所謂經驗界とは作用の作用たる意志によつて求められ、創造せられたものでなければならぬ。純粹統覺の裏面には意志を含んで居なければならぬ。すべて我々の意志は物によつて満足せられると考へられるが、物が我々の欲求の對象となるには、意志によつて構成せられたものでなければならぬ。意志は意志自身の創造によつて満足するのである、自己は自己自身を見ることによつて休するのである。それで我々が直覺的に見ると信ずるものは、省みられた我の如く、我によつて作られたものである、我が我自身を見るのである。神が彼自身の肖像として人間を作つた時、神は彼自身を對象化したのである、彼自身の世界を作つたのである。斯くして、創造せられたものから創造作用を見れば、省みられた自己が省みる自己に對するが如く、何處ま

でも不完全である、不十全である。創造するものは創造せられたものの中に含まれると共に達すべからざる極限である。自己は自己を對象化することはできぬ。能動的自己は達することのできない極限でなければならぬ。

右の如き考へ方から私は藝術的直觀の内容といふのは、純粹意志によつて創造せられた、眞に具體的なる直接の所與であつて、道德的行爲とは純粹意志發展の創造作用であると思ふ。兩者の關係は、創造的意志の立場に於ける反省せられた自己と反省する自己との關係、創造せられたものと創造作用との關係と解すべきであらう。

Fr. Vischer が美を „als Leben in sich gespiegelt“ と云つた様に、美は創造的意志其者が自己の影を映したものである、自己自身を對象化したものである、純粹意志の自覺である。ヘーメの云ふ如き *Unground* が自己自身の中に映した影像は絶美でなければならぬ。藝術的直觀は受動的直觀ではない、純なる作用其者の自覺でなければならぬ。美の内容は我々が純なる行爲的主觀の立場の上に立つことによつて、始めて與へられるのである。純粹活動のアプリオリに於て構成せられるものは、純なる活動でなければならぬ。道德的行爲と云へば、單に人と人との間の抽象的關係に於てのみ考へられるが、意志の單なる形式的善は眞の善ではない。單に善意といふ如き形式に偏す

れば、却つて惡に陥る場合がある。眞の道德的善行爲は具體的人格の發展でなければならぬ。無論美は直に善ではなく、藝術的創作は道德的行爲ではない。併し我々が純粹に道德的行爲の立場に於て物を見る時、先づ一たび全く利害得失の念を離れて眞に物其者を見る藝術的直觀と同様の立場に立たねばならぬ。我々は先づ一たび天上の星を見る如き眼を以て、地上の人間を見ねばならぬ。「目的の王國」は道德的行爲の創造した藝術的作品である。眞に自律的にしてそれ自身に於て善なる道德的行爲は、それ自身の内容を有する創造作用でなければならぬ。單に形式的なる自由意志では、その内容を取り入れる時、他律的とならねばならぬ。道德的行爲の目的は實在的であり、藝術的創造の目的は非實在的であると云ふが、道德的對象界の實在性といふのは自然科学的世界の實在性とは同一でない。

四

藝術的直觀と道德的行爲との關係を上述べた様に、考へ得るならば、時^レの圖式に代へるに、意志^レの圖式を以てし、所謂自然界に代へるに文化の世界を以てすることによつて、私はカントが「數學的原理」と「力學的原理」の關係に就て論じて居る中から藝術

的對象界と道德的世界との關係を明にする多くの示唆を見出し得ると思ふ。此考を明にするため、少しくカントが「經驗の類推」の始に於て云つて居る考を述べて見よう。經驗的知識とは知覺によつて客觀的對象を定める知識である。それで經驗は知覺の綜合であるが、此綜合は知覺の中に含まれて居るのではない、却つて其綜合統一を含んで居るのである。經驗界に於ける知覺と知覺との必然的關係は、單に知覺其者から明にすることはできぬ。空間、時間に於ての存在の必然性は *Apprehension* の中に求めることはできないのである。併し經驗は知覺によつてのみ與へられ、其關係は客觀的に「時」に於て表象せられねばならぬ。然るに「時」自身は知覺することができないから、「時」に於ける物の存在は「時」に於ける結合によつて定める外はない。即ち「時」の三様式 *modi der Zeit* といふものが我々の經驗界を構成する先天的概念となるのである。カントは「時」の三つの様式として *Beharrlichkeit, Folge und Gleichsein* を考へ、之によつて *Grundsatz der Beharrlichkeit der Substanz, Grundsatz der Zeitfolge nach dem Gesetze der Causalität, Grundsatz des Gleichseins nach den Gesetze der Wechselwirkung oder Gemeinschaft* といふ三つの原理を立てて居るのである。

我々の經驗界は純粹統覺の綜合的統一によつて構成せられたものであると云ふ

のが、カントの根本思想である。所謂直覺の底にも、況して想像の底にも統覺の綜合が働いて居らねばならぬ。直覺の形式と考へられる空間時間も、かゝる純我の綜合作用から導き出されねばならぬ。カントが概念と直覺とを結合する圖式として考へた「時」は、純粹統覺の創造作用を最も能く現はしたものでなければならぬ。我々の知識に客觀性を與へる知覺「は時」の形式によつて與へられる、否、時によつて創造せられると云つてよいが、時「自身は知覺せられない。創造せられた物の中に創造作用はない、省みられた自己は省みる自己ではない。併し創造せられたものは創造者ではないが、又之と別物ではない。被創造物は創造者の影を宿して居らなければならぬ、省みられた自己は物ではなくして、自己でなければならぬ。是故に、對象は作用に對して何處までも不完全であり、未完成であり、所與の經驗が自己自身の意義を完成する爲には、無限なる發展の世界に入らねばならぬ、互に偶然的にして各自に全いと思はれる知覺の世界から、必然的關係の世界、思惟の對象たる存在の世界に入らねばならぬ。而して我々の自己は達するところできない無限に深い奥底なるが如く、存在の世界も亦無限でなければならぬ。我々の自覺に於て、對象に向けられた眼が作用自身に向けられる如く、被創造物に於て自己の不完全を自覺した創造者の眼は、自己自

身の中に向けられることによつて、作用自身を對象とする反省の世界が成立するのである。知覺することのできない「時」自身の世界は「時」自身の様式を對象する世界であつて、即ち直接に知覺することのできない物力の世界でなければならぬ。勿論作用が作用自身を對象するには、一層高次の立場に立たねばならぬ作用の作用の立場に立たねばならぬ。物理的世界でも既に無限なる「時」の方向を統一する意志の立場に於て成立つと考ふべきであらう。物力とは意志の對象化せられたものでてゐる。

カントが「時」の三つの様式といふも、單に流れ行く「時」としては考へられないのである。藝術的創造作用といふのは自然界に於ける出來事ではない。無論單に知識の立場からは斯く見られるかも知らぬが、斯く考へるならば、美の一般妥當性は失はれなければならぬ。純なる藝術的創造作用の立場に立つ時我々は自然界を構成するとは異つたアプリアリオリの上に立つて、異つた客觀的世界を構成しつゝあるのである、即ち純粹意志の立場に立つて、純粹意志の對象界を構成しつゝあるのである、自然界と異つた之よりも一層高次の文化の世界を構成しつゝあるのである。我々が因果律の支配の下に、快樂を追うて行動するのではなく、一般妥當的價値を實現することを文化的行爲とするならば、藝術家の創造作用は言ふまでもなく直に文化的行爲で

なければならぬ。之に反し人間が始めて社會を構成し文化的生活に入る時、人生の藝術化が始まるのである。道德的行爲は人生の純なる藝術化でなければならぬかゝる意味に於て藝術も道德も文化現象として、純粹意志の對象界に屬するのである。それで、純粹統覺によつて所謂經驗界が構成せられる如く、純粹意志によつて文化の世界が構成せられ、藝術的に物を見るといふこと、即ち藝術的直觀とこふことは恰も所謂經驗界に於て直覺するといふこと、即ちカントの所謂知覺に相當するのである。藝術の對象として與へられたものに、純粹意志の對象界に於ての所與でなければならぬ、繪畫の對象は手を加へた眼に與へられたものである。純粹意志の對象界としては何物も美ならざるものはない、醜きもの、卑しきものにも、人生の表現して深き美を見出し得るのである。併しカントが知覺は「時」の形式によつて構成せられるが、「時」自身を知覺することはできないと云ふ如く、藝術的對象は純粹意志の構成によつて與へられるが、我々は意志其物を藝術化することはできぬ。被創造物の中に創造者はない、省みられた自己の中に省みる自己はない。藝術的對象に於て我々の人生の影像を見るも、それは人生其者ではない。藝術の中に寫されたる人生は何處までも一面的であり、未完成である。併し省みられた自己は省みる自己其者ではないが、又

自己を離れたものではない、自己の作用の結果たると共に、直に又作用其者である、現在の自己の中に無限なる自己の發展を藏して居なければならぬ、即ち一種の生産點でなければならぬ。我々は「時」其者を知覺することは出來ないが、所謂知覺は我々が「圖式」時の構成の立場に立つことによつて、與へられるのであつて、自覺に於て省みられた自己が直に又省みる自己である如く、其の中に存在の世界への發展を藏して居なければならぬ。是故に我々は知覺の世界から思惟對象の世界に進まねばならぬ、第二次的性質の世界から第一次的性質の世界に入らねばならぬのである。之れと同じく、我々は純粹意志の世界に於ては、藝術的直覺から内面的必然を以て道德的當爲に移り行かねばならぬ。無論、私の斯く云ふのは、藝術から道德が發達すると云ふのではない、唯兩者の深い本質的關係を示すのみである。右の如く純粹意志の受働的立場から能働的立場に移る時、即ち創造作用其の者の自覺の立場に入る時、「時」の三つの様式が我々の存在の世界を構成する根本原理となる如く、純粹意志の様式が道德的世界を構成する根本原理とならねばならぬ。道德的世界とは意志によつて構成せられた世界である、純粹意志の對象界である、人格と人格との關係から成立する「目的の王國」である。道德的世界には本體とか原因とかいふことはない、すべて作用

が作用を生む純なる作用の世界である。意志の立場に於ては「時」の圖式の背後に潜める暗い影は消えてしまはなければならぬ。何となれば意志は作用の作用として内容と形式とを統一する故である。之を作用の *Gemeinschaft* と云ひ得るのであらう併しそれは單に靜なる同時存在ではない、時に於て相矛盾する三つの様式は意志に於て却つてその内面的統一を明にするものである。

五

道德的行爲の目的は言ふまでもなく、或理想の實現でなければならぬ。道德的價値を有するものは、我々の決意であり、實行である。單なる動機は道德的價値を有することはできぬ。而して目的の實現とか、實行とかいふことは、我々の行爲が空間時間、因果の範疇によつて構成せられた所謂存在の世界に於て、事實として現前することである、即ち我々の行爲が此客觀的實在界を動かすことでなければならぬ。斯くして、我々が或場合に道德的立場からして如何に爲すべきかと云ふことは、動かすべからざる嚴肅なる當爲として我に臨んで來るのである。我々は之に従はねばならぬ、之に背けば惡であり、罪である。之に反し、藝術家の創造作用其者は存在の世界に

於ける出來事であるかも知らぬが、藝術的創作の目的は何處までも非實在的である我々の主觀的想像の所産に過がないと考へられる。詩とか繪畫とかいふものに於ては、人生の一面を寫すのみである。そこに何等の道德的善惡の批判はない、惡なるものも藝術の對象として美となることができる。道德的行爲に於ては、義務は従はざるべからざる唯一の義務として我に臨むが、我々は一つの對象に於て無限の美を見出すことができる。美に於て我々は自由である。藝術は遂に遊戯的氣分を脱し得ないのである。

私が善の内容と美の内容と、その性質を同じくすると云ふのは、兩者共に純粹意志の内容に屬するといふことを意味するのである。純なる情意の立場といふのは、常に概念的知識の立場を超越するのみならず、所謂苦樂の感情の立場にも反するのである。快不快といふのは反省せられた感情の種屬概念に過ぎない、創造的感情が己自身の内容を失つて、概念の支配の下に立つ時、單に快を求め不快を避けると考へられるのである。純なる情意は作用の作用として、知識内容に分析することのできない己自身の積極的内容を有つて居る。是故に知識の對象界に對しては何處までも創造的である。之によつて美的内容の先驗性が立せられ、道德的當爲の内容が與へ

られるのである。無論、道德的行爲の目的が實在的であり、藝術的創作の目的は非實在的と考へられるのみならず、繪畫には繪畫の美があり、彫刻には彫刻の美があり、感覺的性質の異なるに従つて、美にも特殊の内容があると考へることもできるであらう。私はかゝる考を十分に認容すると共に、又種々なる藝術の間に於ける内面的統一を認めざるを得ない。寧ろ種々なる藝術は、各その感覺的材料の特色に従つて、多様にして無限に豊富なる一つの藝術的世界の一面を現はすものと見るべきであらう。而して道德的對象界も純なる意志の對象界として此世界と内面的に結合して居ると思ふのである。彫刻家が鑿を以て大理石に向ひ、畫家が筆を取つて紙に臨むといふことと、道德家が教をひき、法律家が法を立つるといふこととは大なる相違があると考へられるであらう、併し兩者共に純粹意志の世界を構成しつゝあるのである。藝術の對象界といへども普通に考へられる如く單に感覺的ではない、感覺的形像の中に含まれたる理念である。特に *Nachvorstellen* によつて構成せられる世界を對象とする詩の如きに至つては、非感覺的にして寧ろ抽象的なるものは *Meyer, Das Stille-
setz der Poesie* に於て明に論せられて居る。道德家や立法家の目的とする所は理想的社會の構成の外にない。道德的行爲は文化的社會を構成する藝術的創造作用で

なければならぬ。然らざれば、單に動機が善なれば、すべてが善であるといふ道德上の主觀主義に陥る外はない。それでは藝術と道德の區別、美と善との相違は何處から起つて來るか。

所謂物理的世界は經驗によつて與へられるが、經驗その儘ではない。我々が直接に經驗する色とか音とかいふものは、直に物の性質ではない。無論、今日の物理學上に於ても感覺的事實を離れて物の存在といふ如きことを考へないであらう。併し物理的世界は感覺的事實を或立場から選擇し構成することから始まるのである。素朴的事實と事實との關係からポアンカレの *Lois* といふ如きものが造られ、法則と法則とを統一するため、更に氏の *Principes* といふ如きものが構成しられる。而して斯く知識を構成して行くのは、一つの統一せる物理的世界の構成に進み行くこと考へることが出来る。物理的知識の眞偽は、此の如き物理的知識其者の目的統一によつて決せられねばならぬ。物理的知識も無限に進み行くものでなければならぬ、絶對の眞もなければ、絶對の偽もないかも知れない。併し我々は物理的知識其者の目的から物理的知識の當爲を立て得るのである。然らざれば物理學といふ學問は成立し得ない。而して物理的知識の方向を示すものは、同時に最初に物理的知識を構成

したものでなければならぬ。目的は最初のアプリオリによつて定まる、終は始めである。此故に知識の進歩は無限でなければならぬ。水中に杖を差込めば、水面に於て折れて見える。單に眼で見居るだけでは、我々は杖が折れて居ると云ふ外はない、併し我々は之を觸覺に訴へて、直にその誤なるを知り、更に光線屈折の理によつて、その然らざるべからざる所以を知ることが出来る。我々が水中に差込まれた杖が折れて見るといふ時既に認識の立場に立つて居るのである。無論、今水中に差込まれた杖が折れて見えると云ふだけならば、單に事實の知識に過ぎないのであるが、此杖が他の場合に於ても、斯くなければならぬ、即ち此杖は折れて居るといへば、既に本體概念によつて事實を統一し、一般化したものである。此時、我々は既に物理的知識に入つて居るのである。而して此立場から此判断の誤なることが證明せられると同時に、此事實は物理的現象として、物理的知識から説明せらるべきことを要求するのである。若し此事實が説明せられないならば、何處までも物理的知識の問題として残されねばならぬ。今、右の如き考を藝術的對象と道德的對象との關係に移して考へて見やう。純なる生命の表現としては、すべてが美であり、善である。我々が純なる心を以て物を見る時、すべてが美ならざるものなく、善ならざるものはない。

純なる心を以て物を見るといふことは、純粹意志の立場に於て物を見ることである。藝術的描寫が醜なるもの、惡なるものをも美化すると云ふのは、之に由るのである。我々が通常、惡と考へるものも、單にそれだけとして見れば、人生の内面的必然の發現として價值あるものである。ニーツチェはすべて價值あるものは惡によつて成されたと云ふ。水中に差込まれた杖が、それだけでは折れて居ると云ひ得るのと同様である。或意志が惡と考へられるのは、他との關係から起つて來る、意志の Hierarchy の中に於て考へられるのである。單に意志の所與としては、善も惡もない、すべて美しき生命の發現と考へられる。唯、意志が意志自身の構成の世界、即ち意志の自覺の世界に進む時、善と惡とが分たれ、善は善として何處までも求むべきであり、惡は惡として何處までも排すべきものとなる。我々が物理的認識の立場の上に立つ時、杖が折れて居るといふとは、誤でなければならぬ。時の三樣式に基く原理によつて、實在と非實在、眞と偽が決せられる如く、純粹意志の樣式に基く道德法によつて、行爲の善惡が決せられるのである。カントの道德法は此の如き、目的の王國を構成する原理である。

水中に差込まれた此杖が、今私に折れて見えると云ふだけならば、單に事實その儘

を言ひ表したものと、眞である。すべての經驗的學問は、かゝる事實的知識を基礎として構成せられるのであらう。我々が本體概念によつて、一般的に此杖は折れて居ると云へば、此時既に誤に陥るのである。純眞なる心の要求は、いづれも美であり善である、否未だ美惡美醜の區別もない。之に反し他との關係を無視して、只管に或要求を貫徹しやうとするならば、如何なる欲求も惡となる。何故にそれが惡となるか。意識一般の立場によつて眞偽が分たれる如く、やはりそれは統一的意識の立場に於てはななければならぬ。但、道德の場合に於てはそれは自然の場合と違ひ一々の作用が自由なる人格的作用として、一つの神的意志に結合すると云ふことでなければならぬ。或一つの欲求が善とか惡とか考へられるのは、それが單なる自然の衝動としてではなく、人格的アブリオリによつて構成せられたものでなければならぬ。自然の衝動が直に「私」の動機となるのではない。それが動機となるには、自由意志の選擇によらねばならぬ、自然的衝動が自然的衝動として我を動かした時、その行爲は倫理的意義を失ふのである。或一つの自然的衝動が「私」の動機となるには、恰も無限點を廻つて再び現れ來る曲線の様に、一度深い我の奥底に消え失せて、復、我の中に現れて來なければならぬ。而して私は斯く自然の衝動が自然として一度我の中に

消えて、人格的現象として再現する時、それは藝術的内容の意味を有つて來なければならぬと思ふ。從來の倫理學者は多く此點に注意して居ないのである。我々の欲求が單に自然であり、之が直に我を動かすとするならば、我が之に従ふことは何處までも他律的であり、善意は全然形式的とならねばならぬ、形式的意志は何等の内容を與へることはできぬ。斯くては行爲の内容を與へるものは功利主義の外にない。衝動的内容が直に道德的行爲の内容として、我其者の中から我を動かすには、人格的内容として創造せられなければならぬ、即ち靈化せられねばならぬ。自然的要求は却つて靈的内容の手段となり、表現と見られねばならぬ。男女の愛といふ如きことであつても、その者が直に美化せられる所に、目的其者としての倫理的意味があるのである。然らざれば、一時的享樂か、さなくば種屬保存といふ如き功利主義の外に意味を有せない。古人の禮とは單に因襲的慣習ではなく、人間の自然的衝動を美化するものである。我々が、或場合に如何に爲すべきかを明にするには、全然利害得失の念を離れて事柄其者を客觀的に映して見なければならぬ、磨き澄まされた純真な心の鏡上に映して見なければならぬ、一度は藝術家が物を見ると同一の態度を以て物を見なければならぬ、藝術家が物其者の中に生きる如く、一度物其者の中に生きて見な

ければならぬ。此の如き心の態度をば我々は眞に良心の聲に耳澄すと云ふのである。大人は嬰兒の心を失はずと云ふ語もあり、私は聖人には藝術的態度がなければならぬと思ふ。浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸といふ様な藝術家的風格が道德家の基調を成して居なければならぬと思ふのである。それで純粹意志の發現たる道德的意志の内容として與へられるものは、藝術的直覺の形に於て與へられた眞なる人格的内容でなければならぬ。純眞なる直覺としては、いづれも美であり、又廣義に於ては善であるとも云ひ得るのであるが、知覺の世覺から純粹統覺の統一によつて成る存在の世界に進む時、眞と僞とが分たれる如く、超越的意志の構成の世界に向ふ時、善と惡とが分たれるのである。純粹統覺の圖式として知覺を構成するが、自分は知覺せられない時が所謂經驗界を構成する如く、純粹意志は自己自身を實現するとのできない無限なる當爲として、統一ある一つの客觀的道德界を構成し、此世界全體の統一の上から我々の行爲の唯一の方向が決定せられ、汝は斯く爲さるべからずと云ふ唯一なる道德的命令が成立するのである。

或は右に云つた様な純粹意志の所與といふ如きものは、未だ藝術の内容とも、道德の内容とも名づくべきものではなく、單にそのいづれにも發展し得べき人格的内

容といふ如きものに過ぎないとも考へられるであらう。無論分析的に考へればかかる内容が藝術家の創造作用と結合して美となり、又道德的行爲の内容として善となり悪となると考へられるであらう。併しかゝる意味に於て與へられた人格的内容といふのは、我々の知的立場に對しての所與の意味でなければならぬ。此の意味に於てはそれは善でもなく、悪でもなく、美でもなく、醜でもない。併し純粹意志に對しての所與、即ち行爲の主觀に對しての所與は、何の方向かへの發展を含んだものでなければならぬ。此意味に於て、それは美であると共に善である。作用が行爲的立場に於て己自身を對象として見る時、それが藝術的直觀であり、無限に自己自身に反省して行く時、それが道德的行爲である。畫家や彫刻家に對して與へられるものは、手を加へた眼に對して與へられたものである。超知識的に動く生命の内容である。此の如き生命の内容こそ、純粹意志の對象界たる文化の世界を構成する材料となるものでなければならぬ。無論、藝術家の見る生命の内容と云ふのは空間の底に潜める生命の内容に過ぎない、成形藝術家の創造作用は眼と手の形成作用に過ぎない。併し藝術家の見る形は單なる形ではなく、生命の表現でなければならぬ。此の如き感覺的世界の構成原理たる生命自身の自覺が、亦道德的内容である。生命が生命自

身を目的として形成し行くのが道德的行爲がある。すべての作用の統一たる作用の作用が内に省みるといふこと、即ち自己自身の世界を構成するといふことは、すべての作用の内容を統一し唯一の對象界を構成することではなればならぬ。此處には恰もライブニッツの可能の世界から現實の世界への如き推移があると思ふ。永久真理の結合して、無限なる可能の世界が神の知に於て考へられ、神の意によつてその一が擇ばれて、唯一なる現實の世界が創造せられるのである。藝術的直觀に於てそれぞれの見方から映された可能的な人生が人生全體の統一的立場から決定せられ、唯一なる現實の人生が成立する時、そこに汝は「斯く爲さるべからず」といふ唯一なる義務の世界が現れるのである。事實的眞理は唯一にして動かすべからざる如く、道德的義務は絶對的命令として遊戲的氣分を許さない。創造作用が自己自身に還り、自己自身に十全なる對象界を求めるとき、そこに無限にして達すべからざる唯一の世界が成立するのである。

六

以上述べた所は、藝術と道德とを共に同一の純粹意志の對象界に屬するものとし

て如何にして兩者の區別及び關係を明にするかの考へ方の一端を示したものに過ぎない。藝術はいづれも純なる人生を映せるものとして、水中の杖が折れて居ると考へられ、天が廻ると考へられる如く、それ自身に全き人生の事實である。併しかゝる事實を構成するアブリオリ自身の自覺によつて創造せられた、それ自身に十全なる對象界に於ては、それは不完全な、偶然的な斷片に過ぎない、與へられたものは全きものではない。己自身に十全なることを求める作用の世界は、無限の當爲でなければならぬ、省みられた自己に對して省みる自己はいつも無限の當爲である。此處に藝術と道德との區別と對立とがあるのである。我々の道德的社會は永久に完成の過程の上にある神の藝術的創作である。而して認識の立場に於て我々の知識内容が眞か僞かでなければならぬ様に、行爲的主觀の立場から見て人生の内容は善か悪かでなければならぬ。善の概念は美の概念と異なり、存在を目的とする考へられるのは、超個人的主觀として唯一の客觀界が要求せられるからである。存在の世界といふのは意識一般の立場に於て、關係の統一によつて與へられるのである。超越的意志の立場は意識一般の立場を含むが故に、善は概念的であり、道德的行爲は實在的でなければならぬ。ベルグソンの如く我々は實在界に衝突して生來の豊富なる

人格を棄てて行かねばならぬと云ひ得る。併し我々は之によつて實在其者を人格化する神の人格を構成するのである。

寄贈書籍雜誌

ケアード

宗教哲學原論

武藤健譯
東京 森出版部

哲學雜誌、丁酉倫理講演集、心理研究、東洋哲學、日華公論、教育研究、
内外教育評論、學校教育、教育學術界、教育時論、教育界、精神運動、國
際聯盟、文化運動、藥王樹、三田文學。